HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語結果構文の統語論的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	邱, 林燕
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12894号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67410
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Linyan_Qiu_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：邱　林　燕

審査委員　主査　教授　山下　好孝
副査　教授　奥　聡
副査　教授　大野　公裕

学位論文題名

中国語結果構文の統語論的研究

本論文は、ミニマリスト・プログラム理論に発展した生成文法の枠組みにおいて、軽動詞理論に基づき、中国語結果構文の構造構築を体系的に解明することを目的としている。

研究の出発点として中国語のＶＲ構造をとりあげ、これに関連する研究を概観している。特に中国語の結果構文の構造を体系的に考察する先行研究の代表とされる Sybesma（1999）などの一連の研究、Huang（2006）の成果を咀嚼したうえ、Sybesma/Huang を批判的に検証し一般性の高い記述を行った石村(2011)などの成果も十分に検討している。その意味で本研究は主な先行研究は網羅しており、学問的価値は高いと言える。

上述の Sybesma(1999)、Huang(2006)では、次のような点が共通して主張されている。

（1）両先行研究の共通点:

a. 結果構文の表面に現れる項の数が構造分析の手がかりとなっている。

b. どのタイプの結果構文においても、主語名詞句は前項動詞 V1 と直接意味選択の関係を持つ構造になっていない。

本研究は、中国語結果構文の構造を分析する際に、主語名詞句と前項動詞 V1 との意味関係も構造に反映させるべきだと主張した。そうすることで、中国語結果構文に見られる多くの事実について新たな観点からの説明を行っている。

さらに、従来の中国語ＶＲ構造の研究では結果構文とされていなかった「方向補語」を持つ構文についても、「場所変化の結果構文」として丁寧に検討し、軽動詞併合の分析によって同様の構造的分析が可能であることを論じている点は評価できる。

本研究は中国語の言語事実に関して、広範なデータを提供している。その上で、外見的な項関係だけでなく、それらの意味関係など深く理論的考察を進め、「軽動詞併合」という視点から、構造上の違いを浮き彫りにした。

本論文の成果として以下のような点が挙げられる。

文の表面に項が一つしか現れないいわゆる自動詞型結果構文、原因項主語を取る原因型結果構文の構造に関して、まず自動詞型結果構文と原因型結果構文の対応関係、そして原因項 NP

と V1 との意味役割関係を考察した上で、自動詞型結果構文には二種類の構造タイプを仮定する必要があることを明確に示した。そして、原因型結果構文の構造構築においては BECOME と併合した V1 がさらに CAUSE に上昇するプロセスを提案した。これによって Sybesma/Huang スタイルの分析では説明が難しかった現象も含め、より一般的な説明が可能となった。

次に、文の表面に主語と目的語の二項が現れる、いわゆる他動詞型結果構文についての構造分析に成功している。他動詞型結果構文では、主語名詞句と目的語名詞句の間に「人とその人の体の部分」のような「譲渡不可能所有」関係を持つ他動詞型結果構文のタイプを設定し、「所有者上昇（Possessor Raising）」のプロセスが関わる構造構築を提案した。そして、部分格（Partitive Case）の概念を導入し、このタイプの他動詞型結果構文の目的語位置の名詞句が「部分格」を付与されると提案することにより、目的語位置の名詞句に求められる意味的性質の説明を試みている。

さらに、主語名詞句が V1 の動作主である他動詞型結果構文の構造についても理論的な分析に成功している。動作主と原因項の両者が「逆行束縛（backward binding）」に対する許容度の違いを見せていることに注目し、両者を構造上区別すべきであることを明らかにした。その上で、動作主主語の他動詞型結果構文について、CAUSE の上位に意志性を導入する機能範疇 v1 が存在する 3 層分裂 VP 構造を提案した。

最後に、状態変化の結果構文と平行して、非対格の特性を示す移動様態動詞の場所変化結果構文を考察した。この構文においても、他のＶＲ構造を持つ文と同様に、軽動詞併合によって構造的分析ができることを示したのは大きな成果である。そして日本語や英語の場所変化結果構文の先行研究の妥当性が、本研究の成果によって強化された。

これらの考察を通じ、本研究の中国語ＶＲ構造に関する考察が、日本語や英語との対照分析において、様々な応用が可能であることを示唆している。

以上、本論文が本研究院の博士号授与の要件を満たしていると検討委員会は判断した。